

モノがなくても知恵があれば

# びと手間から生まれる、豊かな味

モノがないから知恵を使っていた昭和の暮らし。

家族には、一日三度のご飯が何よりの楽しみだった。

子どもたちも、お母さんやおばあさんの家事を手伝った。

「昭和の家事」には、豊かな味への手がかりがある。

生活史研究家

## 小泉和子

●こいずみ・かずこ 1933年東京都生まれ。生活史研究所主宰。昭和のくらし博物館館長。家具道具室内史学会会長。工学博士。主な著書に『日本の住宅』という実験』『室内と家具の歴史』『和食の力』『ちゃぶ台の昭和』『銀座育ち』など。

## 家事体験を喜ぶ子どもたち

東京の大田区に「昭和のくらし博物館」という、私が館長を務める小さな博物館があります。昭和二十六年から四十五年間にわたって私たちの一家が暮らした建物を家財道具とともに丸ごと博物館として公開したものです。展示や講座のほかに、小

学生の子どもたちを対象に昔の家事の体験学習を実施しているのですが、<sup>す</sup>播り鉢<sup>ぼち</sup>でピーナッツを播ってピーナツバターを作ってみたり、たらいと洗濯板で靴下を洗ったりした子どもたちは、みんな大はしゃぎしています。いろいろ聞いてみると、いまの子どもたちは家事を手伝った経験がほとんどないようです。塾や習い事で

忙しいのはわかりますが、子どもたちが家事を手伝うことには、単に母親の仕事を軽減させる以上の意味があると思います。毎日の食事にしても、食材の見分け方から下ごしらえ、味つけ、さらには盛りつけや後始末まで、とても複雑な手順を踏んでようやく口に入れることができるのです。それを間近でいつも見ながら手伝